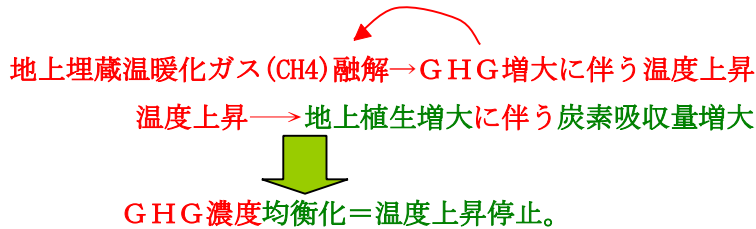


2011/01/03: **訂正** <4度? 上昇停止で人類瀕死存命? と人類政治選択—08/8/11' 15, 9/20>

<http://www.777true.net/upperlimit1.pdf>

(1) **現代の意味で産業革命後定義での4°Cで停止すると思われない。** GHG=温室効果ガス。

米 Chicago 大研究者モデル試算(2004)に拠れば**海底85%メタン崩壊で温度3度C上昇**と予測の解釈で読んだ値と思われる。純自然環境(人為放出干渉のない)氷河温暖周期からのメタン(炭素)地表大気循環10万年長期間での古気候傾向での**温度上昇停止機構**は以下



地上温度上昇に伴う**冷却放射源の放散出力増大と熱入出量衡化=温度上昇停止。**

* GHG濃度は**冷却放射線宇宙透過確率**の決定に作用、だから

透過確率固定の下に地上温度上昇では宇宙通過冷却放射絶対量では増えるが、現状はGHG濃度増大が上回るので赤字収支=**過剰熱入力**(放射強制力)が正值。また、大規模熱容量海洋温度上昇が追隨しておらず、時間遅れがある。その証拠は全球地上温度上昇がより激しい(GHG増大で放射強制力の増大)。

* **氷河期を終端**できるのは火山噴火によるGHG大規模放出、地球軌道変化では無理?、

(2) **現地球の物理化学構造では(1+1)=2°C上昇でも危険(GHG急増大機構のON可能性)。**

<http://www.777true.net/1C-TEMPERATURE-RISE.pdf>

(3) 人為CO2無放出でも甚大天候災害増大をもたらす温度上昇は正帰還で止まらない(IPCC)。
上記一文は間違いと思われる。 引用元を今後探す。

現状は**自然吸収量>自然放出量**、だが現状でも温度上昇による海洋吸収力低下、地上埋蔵GHG融解の要素があり、もし逆転正帰還増大化ならば停止しない。だから**緊急**に人為CO2放出80%以上の大規模削減と人為工作での自然吸収量増大を図る!!!

(4) 昨今話題の古ペルミアン末期のメタン放出と酸欠での90%種の大絶滅規模にはならないと思われる。**上記一文は正しいとは言えない。現状趨勢では(2)の可能性**がある。

(5) 本件報告は新規提唱と同時に誤解もあり、注意が必須。この下に読解を。

(6) 本件は**間違い見本**として保存継続します。

－ 4 度？ 上昇停止で人類瀕死存命？ と人類政治選択 － 08/8/11^15, 9/20, 11/1/3

人為 CO2 無放出でも災害増大をもたらす温度上昇は正帰還？ で止まらない？？？ (IPCC)⁽³⁾。今年北極点では初めて海面露出、近将来に海底メタン融解爆出の危険性指摘がある。巷では古代ペルミアン末期大絶滅取り沙汰で人類絶滅の噂も、然るに**温度上昇上限？ T_M推定では人類瀕死存続可能**の根拠示唆がある⁽¹⁾⁽²⁾？！。洞爺湖サミットで見る如く真相熟知の世界権力者は実効的対策をもたらさなかった。彼等は子供孫と本当に自殺するつもりだったのだろうか？？！、**その裏真相根拠を以下に解析する。**

メタン氷塊引き金説提唱者 J.P.Kennett(米)によれば地球科学者世界は陰謀と賞賛の 2 分にあり、旧帝大系地球科学科では世間騒然に関わらず単独研究不可な気象変動科学看板の教授職は名大学一名程度の孤立状況、他多数は化石鑑賞らしい(火急 2010 年でも！)。

① 過去 50 万年古代気候観測データによれば GHG-温度は 7 回以上も約 10 万年周期変動：

以下で Kennett 指摘の古気候の鋸歯的周期変動が読める、すると現代は**温度上昇最終期？**。

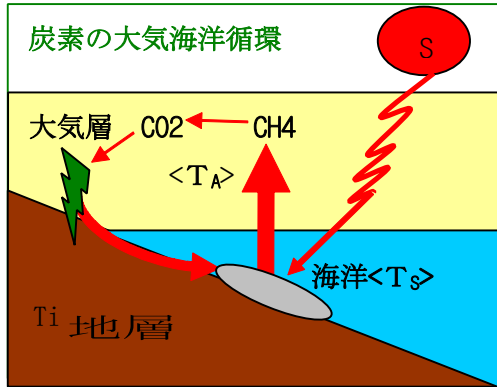
(1)<http://www.daviesand.com/Choices/Precautionary_Planning/New_Data/>

(2)<<http://www.realclimate.org/index.php/archives/2005/11/650000-years-of-greenhouse-gas-concentrations/>>.

(3)<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%BB%E5%83%8F%3A%20Vostok-ice-core-petit.png>>

過去 50 万年古代気候観測データによれば GHG 濃度-温度は 7 回以上も大局的には鋸歯的に、約 10 万年周期で上下振動、<局所区間では種々の揺動要因で細かく短期振動>、**GHG 濃度M最大(海底メタン貯留量最小<筆者見解>)は大気温度T最大に対応、逆の GHG 濃度M最小(海底メタン貯留量最大<筆者見解>)は大気温度T最低に見事に対応、**「メタン崩壊温度上昇特徴は正帰還効果で短期間一気上昇になる危険性だ」。「だがその時は GHG に成る陸上海洋成分出尽くしで**温度上限**になる、温度は幾ら？、人類存続可能か？」現代位相を見るとほぼ**温度最大期間域**にある事<大局超長期視点では本来ならば逆に寒冷化傾斜へ>が判るだろう。然るに現時点全球観測によればメタン貯留量は総化石燃料の 2 倍に相当、米 Chicago 大研究者モデル試算(2004)に拠れば**海底 85%メタン崩壊で温度 3 度 C 上昇**と予測。この跳ね上がり (spike) 値は古気候変動最大値を見れば間違った数字でない。<最近の英国政策は **4 度上昇**を戦略設定>。**この適応を許容しない短時間で全球 3 度上昇は「大部分の地上生命種存命には大打撃になろう」。**だが昨今話題の古ペルミアン末期のメタン放出と酸欠での 90% 種の大絶滅規模にはならないと思われる。無論この時期では食糧-水の**生存資源飢渴**が予測され、生き延びるにしても**超悲惨な状況**は予測に難くない。**即ち全人類絶滅とは言えない。だとすると「現状の温暖化急速度に歯止めを掛けない世界権力趨勢の政治経済政策」の意味とは？ !!! 。**

②超長期周期振動としての{GHG 濃度M-気温T}と同期するメタン海底-大気往復循環:



①左図はメタン二酸化炭素を据えた海洋-大気間の超長期炭素循環模型図。

- (1) が問題のメタン氷塊で主因として
- (2) T_S 上昇で融解して大気放出されると T_A の上昇に正帰還作用。 $T_A \rightarrow T_S \rightarrow T_A$
- (3) その結果、温度 T_A は海底メタン氷塊消滅まで一気上昇する。

☞: 海水面上下動での圧力は温度に比較して微

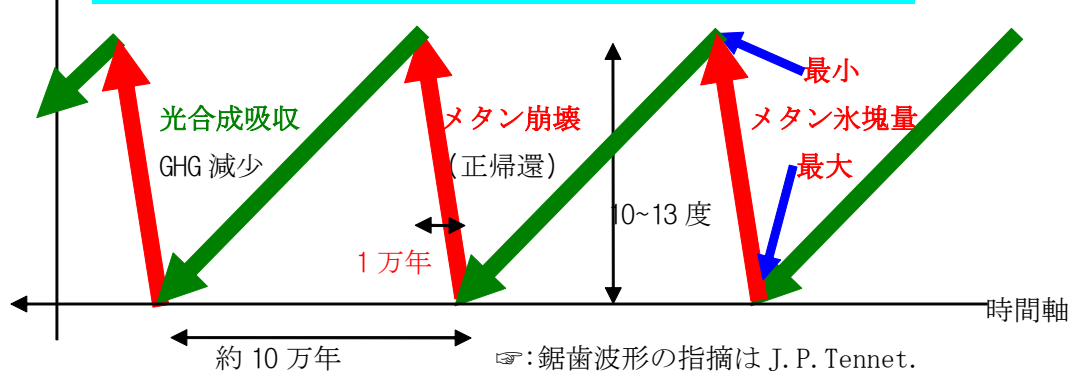
(4)超長期的な大気温直線的下降はCO2 濃度低下に比例:

それは光合成がもたらすだろう。それは陸上海洋植物光合成吸収以外にないだろう！
GHG-温度低下策とは海洋陸上植物生態系爆発的増殖 以外にない！！

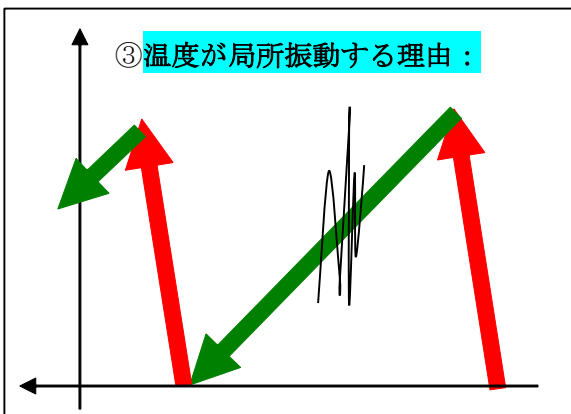
(5)生命はいずれ遺骸となって海洋バクテリアの下にメタン氷塊を形成する。

☞: 人為性皆無の過去慣例では寒冷化入口の現代位相だが、仮に海底メタン出尽くして温度上昇が停止しても植生破壊では寒冷化は起こらない。植生大復帰だけが温度低下へ。

② {GHG 濃度M-気温T}が超長期大局として鋸歯周期振動する理由:



③ 温度が局所振動する理由:



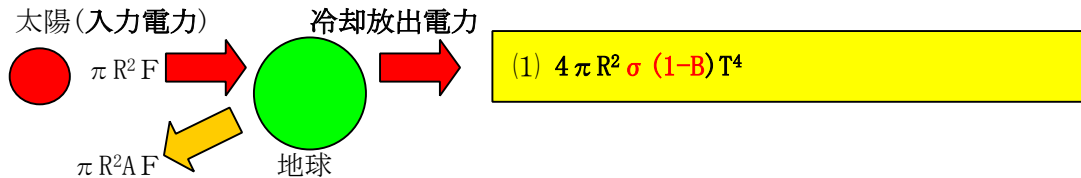
- (1)火山噴火での直接間接温度低下, 上昇
地殻変動と地震, 海流変動,
- (2)火山マグマ流出と環境変化, CO2 排出、
- (3)太陽活動と地球軌道変化、隕石衝突、
- (4)落雷大規模山火事、天候破壊の地表変動、
- (5)動植物異常繁殖、異常絶滅
- (6)局所メタン融解、
- (7)人為 CO2 増大

③ 温室効果ガス≡GHG濃度係数Bのマクロ大気温度決定 機構：

太陽熱は超巨大だから熱放射流出がないと地球は直に焼けてしまう。即ち熱平衡問題として Fourier (仏) により発見された温室効果を既述、熱力学と古典電磁力学から導出。

$$\textcircled{1} \pi R^2 (1-A) F = 4 \pi R^2 \sigma (1-B) T^4. \quad \text{: 空洞輻射。}$$

「入射太陽熱量＝地球放射熱」で昼夜出入り収支はマクロに必ず平衡化する。それが①。



大気圏表層反射電力 <<空洞輻射模型>>

A(反射能アルベド) = 0.3、

F(太陽定数) = 1368 W/m².

$\sigma = 5.67 \times 10^{-8} \text{ W m}^{-2} \text{ K}^{-4}$. (Stefan Boltzmann 定数)

R(地球半径) = 1.5 × 10¹¹ m

地球の冷却熱放射阻害温室効果ガス不在(B=0)の地球温度 = -18 度 C、大変寒い！

問題はもし温室効果ガスが蓄積すると σ 実効値が低下、その補償として地球温度 T を上げないと収支不可能になるので必ず温度上昇する。常識としても温度が高い程に冷えやすい = 熱が外に逃げやすいからだ。その温度上昇こそが問題を招く。

② 冷却放射比例係数 $\sigma \rightarrow \sigma (1-B)$ と温暖化ガスによる低下異常が起こると、温度 T を上げないと収支平衡できない事態に！！

$$(2) T_0 = [(1-A) F / 4 \sigma]^{1/4} = 255 (-18 \text{ 度 C}).$$

$$(3) T = [(1-A) F / 4 (1-B) \sigma]^{1/4} = 288 (\text{現状世界の平均温度 } 15 \text{ 度 C}).$$

$$(4) T/T_0 = [1/(1-B)]^{1/4} = 288/255. \rightarrow B = 0.39$$

(5) 地球気温変動危機は GHG 濃度上昇に伴い B が増大し、T 上昇がないと熱平衡しない。

然るに熱蓄積とはエネルギーであり、ヤカンの底をバナーであぶれば、その底に地球気候変動の小さい地獄模型を見る事ができるだろう。

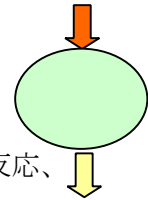
(6) GHG 主役：

現在問題にある温度上昇への地獄案内人は人為放出 CO₂ だが、その先に待つのが真の北極圏域にあるとされる地獄主役 CH₄ の大気流出正帰還急増大、CH₄ は温度と大気成分次第(反応触媒的な酸化窒素とオゾン等)で複数の別途反応経路を経て最後は CO₂ に酸化残留する。それを吸収できるは植物光合成だけである。

④温度上昇速度の大問題<化学物理と生命種持続問題>:

①閉じた体系Gに定常エネルギー流入がある、そこでは普遍的に周期振動が起こる。
これは定常流れのある量子確率過程力学方程式鼓動解(筆者)として証明もある。

- (1)動物は血流で生体各部に必要なエネルギー等を補給するがそれは心臓鼓動を伴う。
(2)エンジンはピストン振動と同期してエネルギー流入を付随する。
(3)太陽エネルギーの定常流入出の下に大規模繁殖植物系光合成反応と同死滅反応、
メタン細菌触媒でのメタン氷塊化反応、そして温度上昇正帰還での大気放出反応、
以上が超長期での循環周期超大規模化学振動にある本件提示例も①の反映と見られる。



従ってこの定常周期振動が正常に動作して行くに欠かせないのが植動物大規模生体系、
ブラジル人預言者 Jucelino 師が嘆いた如く、「人類は余りにも自然を破壊し過ぎた」と言
う警告に耳を貸すべきであろう。余りに破壊が進んだ現状では過去の鋸歯周期振動には
成るまい。ただし地球規模修復すれば道が開けるのでないか。

②大気メタン濃度-温度上昇の正帰還反応系の古代データに見る反応時間:

(1)桁違いに高速な人為気象変動:

①(1)<http://www.daviesand.com/Choices/Precautionary_Planning/New_Data/>

の温度T最小(-8)から最大(+2)に10度C移行する時間は約1万年尺度である。

従って人為無介入の自然状態での正帰還は荒い数値だが1度上昇に1000年単位、

「産業革命以後の人為CO2排出での温度上昇1度が100年だから危険視される無人為
正帰還よりも一桁早いのだ」。この時のCO2増大は荒い値だが80ppv/1万年、だが現代
人為CO2増大は垂直上昇。100ppv/100年。約2ケタも速度が速い事が人為性の最大特徴。

(2)生物自然進化の現実を直に見た人は居ない。

生物一般がその生息環境に適合する形で進化した事は誰も否定しない。だがそれは長時
間経過中での奇跡であろう。生物自然進化の現実を直に見た人は居ない。さほどに進化
には時間がかかる。一般に生命は10数年の環境激変で進化適応など不可能だろう。それ
が絶滅危惧種と言われる。土台人間ですら10年で社会大改変をするのはきつい事だ。

☞: 人為交配によるのは進化?、

(3)最近の氷床コアでの古代気候観測では非人為にしても数年、数十年で数度の超急速上昇
の指摘多数<Reference data(5)(6)(7)>がある。

③恐るべきは1度上昇で大気エネルギーが暴れだしてしまう!!

我々日常生活では温度変化が10度ある事は特別な事でない。一度二度の差異を大問題に
する真の理由は地球平均気温を1度上げるに要する超膨大なエネルギーである。それを
大気が抱えると台風ハリケン、早魃洪水を引き起こし、大海洋水温を上昇させて海面上昇
陸上浸出と海洋生命環境等に激変をもたらす事実だ。だから”1度”が超問題!!

⑤ 陰謀が渦巻く気候変動危機問題の背景：

① 米英の支配層は何を陰謀してきたのか？！：

CO2 人為排出での気候変動危機に関しては米英系言論界が世界をリードの様様だが、実際やっている事を見ると最大排出国は22%筆頭米国, カナダ, オーストラリア, ニュージランド非京都議定書拒否国系と日本である。ちなみに目立たない仏, イタリアは意外にも少量だ。肝心な言ってる事とやってる事の違いに注意！！

<筆者が日本語英語以外が読めない偏見による可能性もあり>。

② 不当な造語と噂で”無知な市民を煙に巻く世界世論心理操作”：

経済, 戦争事案と違い気候危機問題最大特徴は市民一般に理解が困難である事だ。科学技術者にしても専門外となると相当の学習がなければ詳細判断が困難にある。専門家当事者にしても微小にして膨大な複雑乱動体系であるが故に未だ未解明問題もある。とは言えど政治判断には基礎証拠十分と見られる。世襲権力上層には別途情報網もある。古代中世近代現代と連綿と秘密継続にある超能力者予言である。

- (1) 圧倒的事実として 1955 京都議定書 5%削減量程度では急速な気候変動は止まらない。ではなぜあのようなお祭り騒ぎにするのか、世界市民を黙らせる国際陰謀でないのか。
- (2) カソリック総本山の伊(1971年)で先進予言的な「成長への制限」報告がなされた。欧米権力層は当の昔から現代文明の行き先を承知してた経緯がある。
- (3) 近年世界的な環境悪化-天候異変に市民一般が気づいたのは1960~1995年頃の成長期。だが市民も資本主義大発展洪水に吞まれた。だが許容する一般市民に全責任がある。
- (4) 世襲資本家たちは判ってわ居るが己地位保全で今の巨大な流れを止められないと同時に覇者としての適者生存の優生主義思想に固執する。逆にそこに未来口実を見出した。

- ③ メタン崩壊は破滅地獄を意味するが、それでも温度上限は全球3~4度かも知れない。
だとすると人間は瀕死にしても生き延びる可能性がある(この一文は間違い!!)。

注意：本文は今後の情報収集-解析次第で内容改定の可能性がある。

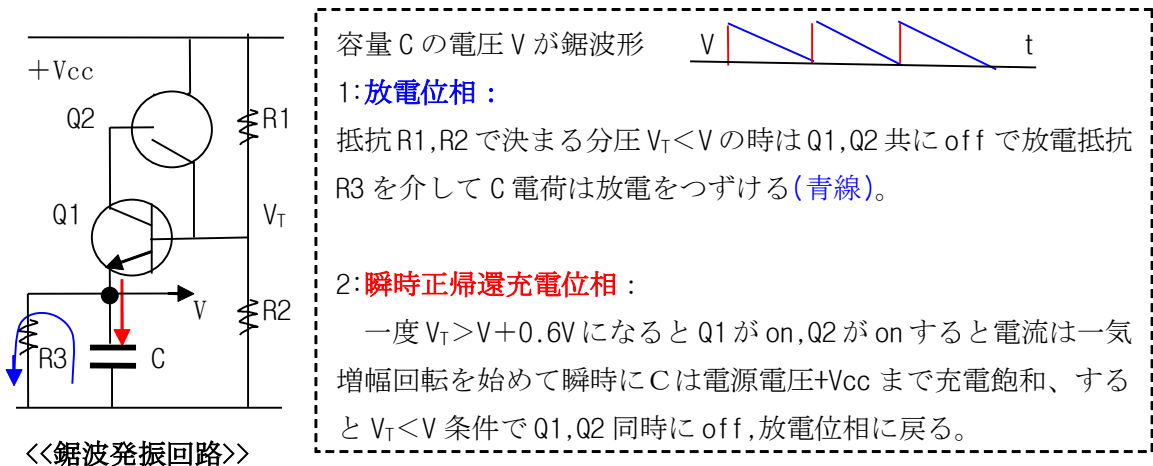
④重要事項の補足(08/9/20)：ミランコビッチサイクルの影響、その他：

太陽放射エネルギーが一定としても地球惑星軌道-地軸の変動次第では地上入射量に変動発生、地表温度に影響する。典型が太陽-地球-月(海洋潮干運動)等(3体問題以上!)相互作用による万年単位以上の長周期ミランコビッチサイクル変動,以下は(9)からの引用要約。

日射量変動超長期周期成分は{1万9千,2万3千,4万1千,5万4千年}が顕著。この結果は、第四紀氷期サイクルが日射量変動に駆動されているという Milankovitch 説の正しさを支持する。数%の日射量変化でも氷期サイクルでは気候変動をもたらし得るという。

本件で提示した荒く 10 万年周期はいずれの上記成分の倍数になえりる。即ち 10 万年周期その物との一対一の周波数引き込みではないにせよ、超長期大規模化学反応振動の特に「CH₄ 大気濃度最低から急速に鋸波が立ち上がる位相」で引き金要因になると見れば良いのでは。但し問題として鋸波は立ち上がりと立ち下りでは非対称にあり、ミランコビッチ成分は皆、ほぼ対称な擬似調和振動的である違いに注目、この非対称性はメタン氷塊急速融解と CO₂ 光合成での超長期吸収化学過程の差異に由来すると思われる。

この違いは発振回路形式でも判る。調和振動発振回路では周波数選択要素が要件になる。他方鋸波発振では容量C充放電時定数と閾値電圧である飽和と飢渴の非線形要素に支配される。C充電電荷量はメタン氷塊蓄積量に相当。下図回路は適正定数では実働確認済み。



—REFERENCE DATA—

- (1) J. P. Kennett; Report of the **Methane Hydrate Advisory Committee on Methane Hydrate Issues and Opportunities** <Appendix B: Role of Methane Hydrate in Climate Change>. <[http://www.fe.doe.gov/programs/oilgas/publications/methane_hydrates/CongressReport.pdf#search='role of methane hydrates in global climate change James P. Kennett'](http://www.fe.doe.gov/programs/oilgas/publications/methane_hydrates/CongressReport.pdf#search='role%20of%20methane%20hydrates%20in%20global%20climate%20change%20James%20P.%20Kennett')>
- (2) Bruce Buffett*, David Archer¹, The University of Chicago, Geophysics
Global inventory of methane clathrate: Sensitivity to change in deep ocean.
<<http://geosci.uchicago.edu/~archer/reprints/buffett.2004.clathrates.Pdf>>
- (3) Gavin Schmidt, September 2004;
Methane: A Scientific Journey from Obscurity to Climate Super-Stardom
<<http://www.giss.nasa.gov/research/features/methane/>>
- (4) Volker Mrasek, **A Storehouse of Greenhouse Gases Is Opening in Siberia**
<<http://www.spiegel.de/international/world/0,1518,547976,00.html>>
- (5) Pre-Holocene Rapid Climate Change from the ARCSS/GISP2 Ice Core
<<http://www.gisp2.sr.unh.edu/DATA/fancy.html>>
- (6) Greenland ice core analysis shows drastic change near end of last ice age.
<<http://www.sciencedaily.com/releases/2008/06/080619142112.htm>>
- (7) High resolution Greenland ice core data shows abrupt climate change happens in few years. <<http://www.sciencemag.org/cgi/content/abstract/321/5889/680>>
- (8) ice core <http://en.wikipedia.org/wiki/Ice_core>
- (9) “第四紀の氷期サイクルと日射量変動, (伊藤孝士*阿部彩子), 地学雑誌”で検索engineをクリック。Milankovitchサイクルに詳しい。同サイクルは地球化学会員より教唆に感謝。
<<http://www.geog.or.jp/journal/back/pdf116-6/p768-782.Pdf>>